

山田太一

新潮社

砂の上の

ダンス



砂の上の
ダンス

江苏工业学院图书馆
藏书章

山田太一

新潮社

すな　うえ
砂の上のダンス

印刷——一九九〇年五月二五日

発行——一九九〇年五月二〇日

著者——山田太一
やまだ　たいいち

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——業務部(03)二六六—五一—
編集部(03)二六六—五四—

振替——東京四—八〇八

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——大口製本株式会社

© Taichi Yamada 1990, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-360604-5 C0093

価格はカバーに表示してあります。



砂の上のダンス * 目次

砂の上のダンス

5

ジャンプ

111

装
画
*
吉
原
英
里

砂の上のダンスへ戯曲集◇

砂の上のダンス

第一幕

登場人物

平岡信太郎

平岡 玲子

角 和俊

角 茅

江崎 昭正

江崎 泰子

柴田 誠

草薙 葉子

開幕前にアラビア音楽。この芝居はアラブの架空の国の砂漠に隣接する地域を舞台にしているので、国を特定出来るような曲ではないことが望ましい。その曲遠ざかり、砂嵐の音。その中で、玄関のブザーの音が聞こえはじめる。

幕が開く。

平岡家・居間

夕方。誰もいない。砂嵐が窓を揺るがせている。いくつかの窓は、よろいど 錠戸が閉められて外が見えないが、一ヶ所だけ錠戸がボタンボタンと翻っている。そこから見えるかどうか分らないが外は樹木と隣家の側面である。その隣家も日本人赴任者よめいのための住宅で、江崎夫妻が住んでいる。ブザーの音、しつこすぎず常識の範囲で短くやむ。

下手のベッドルームに通ずるドアがあく。

江崎泰子（40）が足早やに出て来る。

また、ブザーの音。

泰子（慌てずにドアへ行き）どなた？

柴田誠の声 柴田と申します。東京本社から赴任して参りました。

泰子（錠をはずし、ドアを少しあける）

柴田（とにかく砂嵐から逃がれたくて身体を入れ、トランクをひきずり入れ、息をつく
と咳せきが出てしまう）

泰子（素早くドアを閉め、窓へ行き錠戸を閉め）柴田さん？

柴田 はい。テレックスでは飛行場に江崎さんがおいで下さるということでしたけど（咳）

泰子 いなかった？

柴田 お迎えいただいたんでしょか？

泰子 いいのよ。

柴田 随分搜したんですけど（咳）

泰子 なにか欲しい？

柴田 は？

泰子 のむもの。

柴田 あ、出来たら、つめたいお水を。

泰子 搜しようもなかったでしょう？ あんなちっぽけな飛行場（と台所のドアへ）

柴田 はい。正直いって、待合室と外を一回りするともうなにもなくて。

泰子 ドジなの。

柴田 は？

泰子 あいつ、ドジなのよ（と台所へ）

柴田 いいえ。もっと待つべきだったのかもしれない。ただタクシーはないし、小一時間たっていましたし、こちらへ電話をかけたんですが通じなくて、クーデターの混乱がまだ続いているそうですね。

泰子 （麦茶を入れたグラスを持って現われ）白タク？

柴田 いえ。軽トラです。

泰子 軽トラ？

柴田 はい。飛行場のカウンターの男に、チップをやつて、この日本人宿舎の方へ行く
便があつたらつて。ウワ、これ（とグラスをすかして見る）

泰子 麦茶よ。

柴田 （笑つて）水がこんな色していたら大変だと思つて。

泰子 大変なことはいくらでもあるわ。

柴田 はあ——いただきます（とのむ）

泰子 はじめてのあなたが、なんとかたどりついたというのに、迎えに行つた男は、どこ
へ行つたのか。

柴田 なにかあつたんでしようか？

泰子 いいのよ、あんな奴。

柴田 そんな——。

泰子 たかだか百二十キロ先の飛行場に行くこともろくに出来ない奴なんてどうなろうと
いいの（とちよつと強きう）

柴田 （氣^け圧されて）はあ——。

泰子 掛けたら。

柴田 はい。あの——。

泰子 なに？

柴田 私、海外勤務ははじめてです。こちらへ配属されて、張り切っています。

泰子 どうして？

柴田 は？

泰子 もう四ヶ月、此処の工事はストップしてるのよ。二十四人いた日本人が、いまは六人。それも半分は女房だから社員は三人。あなたが来て四人。何故あなたは来たの？

クーデターで政府が変わって、現地の工事担当者は一人残らずいなくなった。首をはねられて殺された人もいるっていうわ。代りの人間は誰も来ない。日本人が三人で、この砂漠のつくりかけの化学工場の番をしているだけ。債務不履行で日本側は撤退するんじゃないかと思っていたのに、新しい人を寄こすなんて、本社はどういうつもりなのかしら？

柴田 この合併事業を諦めていないというアピールもあると思います。

泰子 でも、さしあたってはガードマンよ。朝昼晩、工場をパトロールして泥棒の警戒、こわされた塀を直すぐらいのこと。

柴田 すべてはじめての経験ですから、全部が勉強だと思っています。

泰子 (苦笑して) そんな綺麗な口をきかなくてもいいのよ。

柴田 いえ。海外勤務は奥さまの役割りが大きいと聞いていましたけど、やっぱり所長夫人となると、随分目を配ってらっしゃるんだなって。

泰子 あら (と苦笑)

柴田 私も、ドジなこと、いろいろやと思います。

泰子 私は所長夫人じゃないわ。

柴田 あ、でも、こちらは平岡所長のお宅では？

泰子 平岡所長のお宅だけれど、私は江崎の妻です。

柴田 江崎さんの――。

泰子 あなたを迎えに行つたまま帰つて来ないドジな男の妻。

柴田 そうですか。

泰子 大体私は他所^{よそ}の御主人をドジだなんていうほど不遜^{ふそん}じゃないわ。

柴田 しかし、江崎さん、どうしたんでしょうか？

泰子 いいの。

柴田 いいのって。

泰子 亭主だからいうの。いいの。あんな奴どうなつてもいいって。

下手のドアがあき、角^{すみ}茅^{かや}が登場。

茅 柴田さん？

柴田 はい（と立上り）ただいま到着いたしました。

泰子 こちらも所長夫人じゃないのよ。

柴田 あ、そうですか。

茅 ま、お若い。

泰子 囑託^{かくたく}の角^{すみ}さんの奥さま。茅さんって仰有^{かっや}るの。

柴田 よろしくお願いします。

茅 よろしく（泰子へ）あら、泰子さん御主人は？

柴田 はい、それが――。

泰子 いいの、余計なこといわないで。

茅 余計なことって？

泰子 家へ帰ったんです。

柴田 あ――（それでいいのだろうか、と思う）

泰子 こちらの御主人はね、アラブ地域の大ヴェテランなの。

柴田 伺ってます。

泰子 だから定年なんか関係なく会社が手放せない人なの。

茅 そんなじゃないのよ。

泰子 ううん。

茅 （泰子へ）いいました？

泰子 なにを？

茅 東京のこと。

泰子 ああ、まだ。

茅 いっておいた方がいいと思って。

柴田 （不安になり）東京のことですか？

茅 そう。

柴田 東京で、なにかあったんでしょうか？

茅 大地震。

柴田 え？（と驚く）

泰子 嘘よ（と笑う）もつともこの三日間電話もテレックスも通じないんだから、なにが起つてるか分らないけどね。

茅 ごめんなさい。つまらない冗談をいったわ。

柴田 でも、東京のことって。

茅 （寝室のドアをちらと見て）ちよつとね。いえね。

柴田 はい。

茅 所長の奥さま、御加減が悪いの。

柴田 御病氣ですか。

茅 ううん、病氣というほどのことはないのだけれど、神経がね、少しまいっているの。

柴田 ああ。

泰子 だから東京がいいようなことはいわないで貰いたいの。

茅 日本が素晴らしいというようなことは、絶対に。

柴田 はい。ホームシックですか。

茅 そんなあなた簡単にいわないで。所長夫人は、海外生活十六年よ。

泰子 こちら（茅）は、もう三十五年以上。

柴田 はあ。

茅 今更ホームシックでもないけど、気の弱りがある時は、日本がいいようなことはね。